

TOKYO
METROPOLITAN
ART MUSEUM
NEWS

東京都 美術館 ニュース

No. 483

開館100周年記念号



東京都美術館
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM



開館100周年記念メッセージ

2026(令和8)年、東京都美術館は開館100周年を迎えました。当館の誕生には、九州の実業家・佐藤慶太郎の多額の寄付がありました。石炭業で得た財を惜しみなく提供し、1926(大正15)年、わが国初の公立美術館が誕生したのです。

佐藤は美術館だけでなく、困窮者の救済や学校設立、食生活・農村の改善、女子教育の向上など、人々が「より良く生きる」ための活動に私財の多くを捧げました。彼が望んだのは、今日という「ウェルビーイング」の実現でした。その精神こそ、当館が受け継ぐべき使命の原点であると、私たちは考えています。

2012(平成24)年のリニューアルに際し、私たちは「アートへの入口」となることを使命として掲げました。新たな価値観に触れ、自己と向き合い、世界との絆が深まる「創造と共生の場＝アート・コミュニティ」を築く。そして「生きる糧としてのアート」と出会う場となり、「心のゆたかさの拠り所」をめざす、というものです。

それから10余年、人間の表現の多様性に目を向けつつ、人と作品、人と人をつなぎ、創造的な時間が育まれる場となるよう、独自のテーマによる企画展やアート・コミュニケーション事業を進めてきました。しかし、その歩みはまだ道半ばにあると感じています。

21世紀の社会は100年前とは大きく姿を変え、テクノロジーは想像を超える発展を遂げました。それでも世界は多くの問題を抱え、人々の分断も後を絶ちません。物質的な豊かさだけでは幸福は保証されず、生きるうえでの確かな支えが問われています。

私たちは、アートこそが「より良く生きる」ための確かな支えになると信じています。人間への信頼を育み、希望を灯し、困難な時代にも世界の可能性を示してくれる力があるからです。アートは、これからの社会にとってますます不可欠な存在となるでしょう。

佐藤慶太郎の「願い」を継承し、あらゆる人にとっての「アートへの入口」となり、「生きる糧としてのアート」の魅力を実感いただける美術館を目指して、私たちはこれからも歩みを続けてまいります。

東京都美術館

東京都美術館 100年のあゆみ

東京府美術館開館

東京府美術館が開館したのは、1926(大正15)年5月1日。それまで帝展や院展などの会場として上野公園の竹ノ台陳列館はありましたが、公立の美術館はこれが日本で最初でした。ヨーロッパの都市には、文化のシンボルとして美術館があるのが常識。しかし、日本にはそれがない。日本が西洋に後れをとらないためにも「美術館が欲しい!」という声が、美術界からも一般からも寄せられていたのです。そのことを知った九州の石炭商・佐藤慶太郎が、建設資金として100万円(現在の約40億円)を東京都に寄付しました。佐藤にとって、この額は全財産のおよそ半分に当たっていました。これをきっかけに、当時の東京美術学校校長・正木直彦(1862-1940)らをブレーンとして、美術館建設が始まったのです。

常設美術館か展覧会場か?

東京府はまず美術展示専用の施設(ギャラリー)を切望する美術家団体の要望に応える必要がありました。すでに官展(文展、帝展)は設立以来20年近くが経過し、新進気鋭の在野の作家たちの活動も活発になっていました。そこで、作品の展示・鑑賞という美術の普及と大衆化をうながす舞台として、本格的なギャラリーをすることが喫緊の課題とされていたのです。

こうして生まれた府美術館は、まもなく自主企画展を実施し、収蔵作品も年々増やしてゆき、ミュージアムとしての力をしだいに蓄えていきます。



旧館正面階段



東京府美術館主催「大原孫三郎蒐集泰西美術展」
(1928[昭和3]年)





旧館彫刻陳列室



旧館彫刻陳列室展示風景（1960年代）



岡田信一郎の「美の殿堂」

美術館の設計者は、様式美を追求した建築家・岡田信一郎（1883-1932）でした。西欧の古典様式に精通し、近代建築理論にも詳しい岡田は、ヨーロッパの神殿を思わせる6本の巨大な列柱と大階段を備えた建築を実現します。

当時、官展、院展、二科展などへ入選し、ここに飾られることは一人前の芸術家として認められたことを意味していました。入選の名誉と古典的な建築様式が相まって、いつからか府美術館は「美の殿堂」と称されるように。当時の府美術館の建物（旧館）を知る人たちは、総ガラス張りの天井を持つ吹き抜けに自然光が差し込む彫刻陳列室の美しさが印象的だったようです。拡散した陽光が均質に行き渡り、彫刻が生きて語りかけてくれるように見えたといいます。

戦争美術展の時代

1930年代後半の日中戦争以降、朝鮮や満州で制作された絵画がしだいに多くなってきました。戦時下では、新聞社や陸軍美術協会主催で「大東亜共栄圏美術展」（1942〔昭和17〕年）など時局を反映した戦争美術展が相次ぎ、多くの観覧者を集めました。

終戦後、GHQ（連合軍最高司令部）は全国各地から153点の戦争画を集め、東京都美術館（1943〔昭和18〕年に改称）の展示室に一時接收・保管させました。その一方で、早くも終戦の翌年には、官展は「日展」として復活し、国画会や二科展など分野展も再開され、戦争美術展を主催していた各新聞社も、「美術団体連合展」など、欧米中心の価値観に合わせた展覧会を積極的に開催していきます。

「佐藤記念室」の開室

1953（昭和28）年3月、1階北側の工芸展示室が改装され、念願の常設展示室「佐藤記念室」が開設されました。当初は複製印刷物などを展示し、美術史理解と鑑賞に役立てる意味で、図書室と展示室の中間のような教育的な場所でした。最初の展示は「印象派絵画複製展」で、映写会、講演会、デッサン会にも活用され、将来的には美術資料や図書の収蔵も意図されていました。実際に、このころから収蔵作品の収集も積極的に行われ、1956（昭和31）年5月には「日本洋画の『あけぼの』明治初期洋画展」を開催。学芸員がまだいない時代での画期的な日本近代美術展覧会でした。佐藤記念室は日本の近代美術館の常設展示室と教育普及スペースのプロトタイプ（原型）だったともいえるでしょう。

近代、現代美術の「戦いの場」として

開館当時の美術界は官展と在野、新旧の美術団体が切磋琢磨する時代でした。また書道も豊道春海らの尽力で開館年から公募展が実施され、美術の一ジャンルとして認知されるようになります。生け花や盆石、盆栽などもそれに続きました。

戦後、1960年代には既存の美術を打ち破る前衛の動向が台頭し、「読売アンデパンダン展」では「反芸術」を標榜するグループの活動で会場は大きな熱気に包まれました。1970（昭和45）年の第10回日本国際美術展「人間と物質」も、欧米の新しい美術表現を紹介した伝説的な展覧会となりました。

東京都美術館は「美の殿堂」であった一方、新旧美術の戦いの場、既存概念を打ち破ろうとする若者のエネルギーが炸裂する創造の舞台でもあったのです。

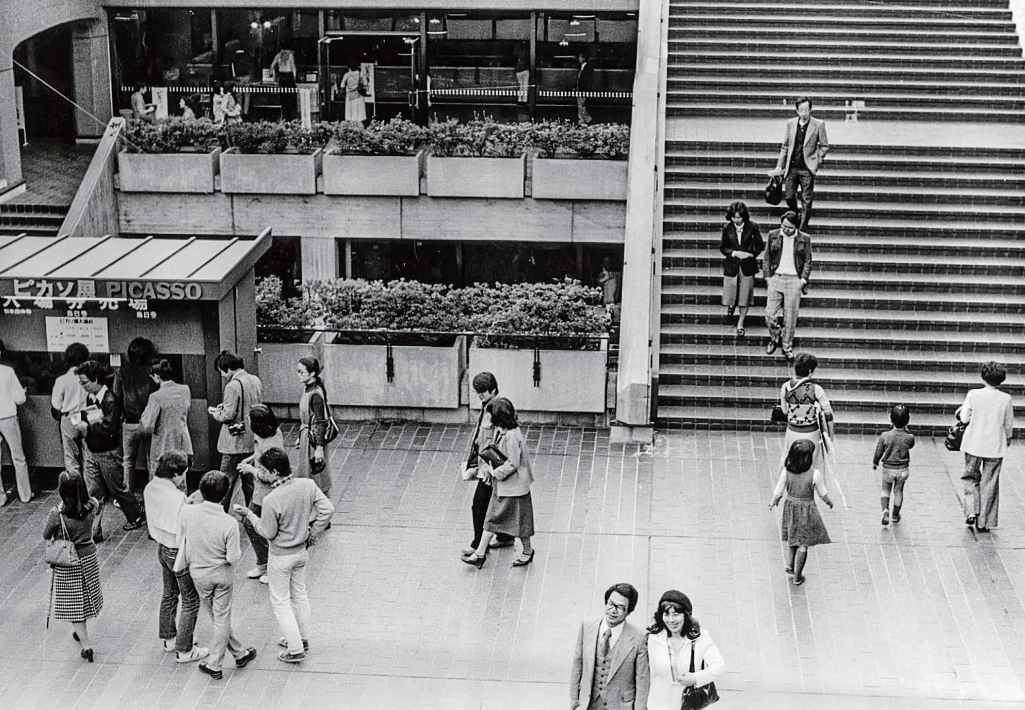


印象派絵画複製展（佐藤記念室 1953〔昭和28〕年）

1926→1974

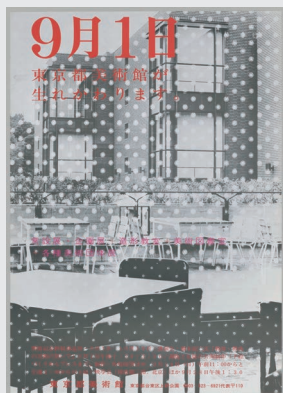


旧館正面階段（1960〔昭和35〕年頃）



ピカソ展のチケットを買う人々 (1977 [昭和52] 年)

新館時代



新館開館記念ポスター
(1975 [昭和50] 年)



前川國男のモダニズム

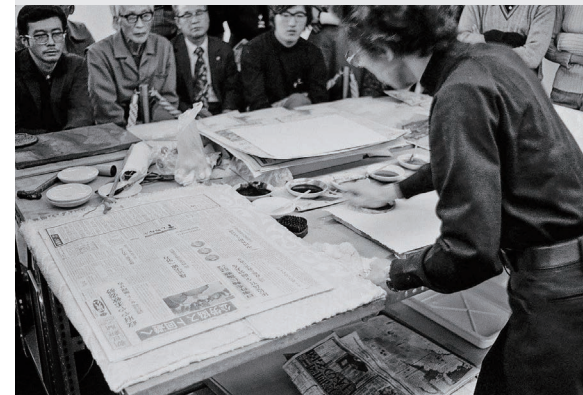
1975 (昭和50) 年9月、前川國男建築設計事務所の設計による新館が開館しました。日本モダニズム建築の巨匠である前川は、地下1階をメインフロアとし、機能ごとにブロック化された各棟 (公募棟、企画棟、管理棟、文化棟) に取り巻かれたエスプラナードから地下1階に導くように設計しています。限られた敷地に多くのギャラリーと施設を機能的に配するため、相当の苦勞をしたといえます。来訪者は、地下にある入口正面の総合受付で案内され、目当ての展示棟に導かれ、鑑賞後は1階中央の食堂に戻り、ガラス越しに外を眺めながらお茶を飲み、団らんでるように配慮されています。

東京都現代美術館の開館以後

東京都美術館が担ってきた現代美術館としての役割は、同じく都立文化施設として新たに1995 (平成7) 年に開館した東京都現代美術館 (江東区木場) に継承され、約3千点のコレクションと美術図書約6万冊、そして教育普及、公開制の図書室といった事業が学芸員と共に移管されました。以降、公募展とマスコミ等との共催による特別展が2本柱になります。「オルセー美術館展 モデルニテ＝パリ・近代の誕生」(1996 [平成8] 年) など、世界に名だたる美術館のコレクションを紹介する展覧会が意欲的に開催され、多くの来館者に親しまれてきました。また、2007 (平成19) 年1月には六本木に国立新美術館がオープンし、上野と六本木の両美術館が公募展会場としての役割を分担することになりました。

教育普及活動への力点

新館の活動は、公募展と自主事業を柱に、専門職として学芸員と司書を配置し現代美術を紹介する意欲的な企画展を次々と開催し、関連作品を収集、収蔵作品展も定期的に開催していきました。1976 (昭和51) 年には一般公開の美術図書室が設置され、司書が学芸員と並走して図録の充実を図りました。さらに、これまで美術に縁のなかった人のための普及事業など、新たな社会教育的活動に力点が置かれました。全国でも前例がなかった作家による造形講座や公開制作などを開催し、展示、作品収集事業と有機的に関連させます。これらの取り組みは、現在の美術館でのワークショップの源流となっています。



木版画公開制作 (1976 [昭和51] 年)

1975→2011



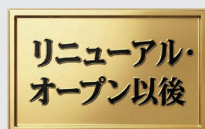
第2回造形教室 (1977 [昭和52] 年)



リニューアル記念特別展「マウリッツハイス美術館展 オランダ・フランドル絵画の至宝」展示風景
主催：東京都美術館（公益財団法人東京都歴史文化財団）、朝日新聞社、フジテレビジョン 2012（平成24）年
撮影：広瀬達郎



企画展「大地に耳をすます 気配と手ざわり」展示風景
2024（令和6）年 撮影：田村融市郎



「アートへの入口」を使命に

2012（平成24）年4月、東京都美術館は大規模なリニューアル工事を経て、新たに「アートへの入口」「生きる糧としてのアート」などの使命（ミッション）を掲げ、生まれ変わりました。マスコミとの共催による大規模な特別展と公募展に加えて、学芸員を増員し、企画展、アート・コミュニケーション事業等をスタート。これまで美術に触れる機会の少なかった人々が美術に親しむきっかけとなる試みに意欲的に取り組んでいます。

ユニークな企画展の取り組み

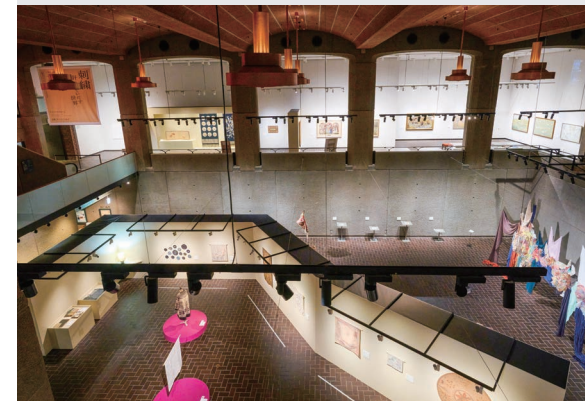
「アーツ&ライフ展」「現代作家展」「アーツ&ケア展」の3つのテーマを掲げ、独自の企画展を毎年開催してきました。さらに、東京都美術館が所蔵する「書」と他の都立美術館、博物館が所蔵する豊富な「東京都コレクション」を紹介する展覧会も毎年テーマを変えて、実施しています。

公募団体展、学校教育展、連携展、そして「公募展活性化事業」へ

公募棟には12のギャラリーがあり、約250の公募団体の主催により、絵画、彫刻、工芸、書など「公募団体展」を毎年開催しています。また、小中高校生の作品や美術大学、専門学校生の作品発表の場となる「学校教育展」も実施しています。加えて、「公募展活性化事業」として、毎年テーマを決めて公募展で活躍する作家を紹介する企画シリーズ「上野アーティストプロジェクト」、新しい発想によるアートの作り手の支援を目的として、企画公募「都美セレクション グループ展」を開催してきました。この2展は、本館ギャラリーA、B、Cのユニークな空間を生かして実施しています。

アート・コミュニケーション事業の開始

すべての人に開かれた美術館を目指して、当館と東京藝術大学との連携がスタートしました。「とびらプロジェクト」では、一般から募集したアート・コミュニケータ「とびラー」と、学芸員や大学教員などの専門家が共に美術館を拠点に、人と作品、人と人、人と場所をつないでいます。「Museum Start あいうえの」では、当館を含む上野公園にある9つの文化施設が連携し、子どもたちにより豊かな体験を提供できるよう、学びの環境整備を展開しています。また2021（令和3）年からは、シニア世代を対象に歳を重ねても「ずっと」美術館やアートが暮らしの中にあることを目指し、創造的に作品と出会う機会を医療福祉機関と連携してつくる「Creative Ageing ずっととび」を実施しています。



上野アーティストプロジェクト2025
「刺繍 — 針がすくいだす世界」展示風景
2025（令和7）年—2026（令和8）年
撮影：鈴木静華

2012+2026



とびラーの皆さん 2025（令和7）年

ふたつの東京都美術館 建築家・岡田信一郎と前川國男

ここでは東京都美術館の建築の歴史をたどってみましょう。

旧館から新館へ

1926（大正15）年に開館した当館は、現在の建物より少し北側にありました。今の上野公園の噴水の西側、とお伝えしたらかわりやすいでしょうか。その建物は岡田信一郎により設計されました。岡田は黒田記念館やかつての歌舞伎座を手がけた建築家です。

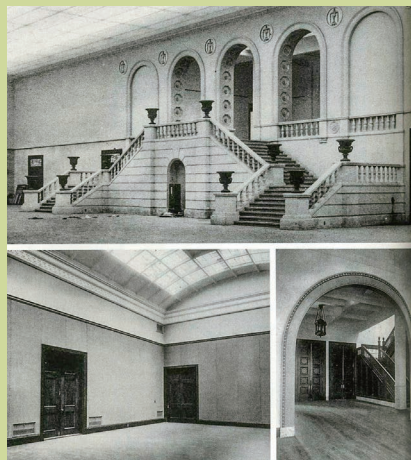
東西南北に配置された出入口には、列柱が配置されていました。また、正面入口には大階段が設置され、扉にはライオンの頭をかたどったドアノッカーもつけられ、さながら大神殿のようであったといわれています。



東京都美術館正面、年代不明、東京都美術館アーカイブズ
Main Entrance, date unknown.
Tokyo Metropolitan Art Museum Archives

展示室は口の字型に配置され、地上階の工芸室や食堂の壁面には窓が、メインフロアの展示室には天窗が設けられていました。日本初の本格的な美術館建築に、岡田がとても意欲的に取り組んでいたことが、館内の意匠のあちこちから感じられるものでした。

しかし、その建物も老朽化により、新しい美術館の建築構想がもちあがります。1960年代後半のことです。建築を専門にする大学教員らにより、建物の状況調査が行われました。また、新しい美術館

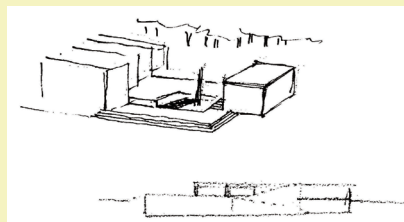


上：旧館内観 彫刻陳列室、建物当初
左下：旧館内観 2階陳列室、1926年頃
右下：旧館内観 正面玄関広間、1926年頃

上：東京都美術館80周年記念誌より転載、下2点：東京都美術館アーカイブズ
Above: Original Building interior. Sculpture gallery
Below left: Original Building interior. 2nd floor gallery, C 1926
Below right: Original Building interior. Main entrance hall, C 1926
Above: Reprinted from Tokyo Metropolitan Art Museum 80th Anniversary Publication
Below left, right: Tokyo Metropolitan Art Museum Archives

はどのようなものであるべきかという検討も進みました。加えて、当館では開館当初から、年間を通じて公募団体による展覧会も開催されていたため、長期休館をして建物を取り壊し、建て直すことは難しい状況にありました。その結果、美術館を開館したまま、隣の敷地に新しい美術館を建設するという方針が立てられました。

新しい建物の設計を任されたのが、前川國男です。前川は同じ上野公園内の東京文化会館や国立西洋美術館新館を設計した建築家です。新しい美術館を設計するにあたり、いくつかの条件が提示されました。前川はこの条件をクリアするために、敷地内に小さな街のような配置をデ



前川によるスケッチ、『前川國男＝コスモスと方法』より転載、1985年

Sketch by Mayekawa reprinted from MAYEKAWA Kunio: *Le Cosmos et la Méthode*, 1985

ザインし、建物の約6割を地下に埋めるという設計をしました。

当時はオイルショックの時代。工事中、たびたびトラブルに見舞われながらも、1975（昭和50）年に新しい美術館が開館します。当時撮影された航空写真には旧美術館（写真上側）と新美術館（写真下側）が並んで写っています。



1975年頃撮影、東京都美術館アーカイブズ
C1975, Tokyo Metropolitan Art Museum Archives

新館の設計思想

新しい美術館には、3つの機能が求められました。1. 常設・企画展示機能、2. 新作発表機能、3. 文化活動機能です。ど

The original building of the Tokyo Metropolitan (Prefecture) Art Museum opened to a design by OKADA Shinichiro in 1926. It was located on the west side of the Ueno Park Grand Fountain. A majestic building with colonnades and grand staircases in the manner of Great temple, it drew public attention as Japan's first dedicated museum building, replete with galleries arranged around a central courtyard and skylights for natural lighting. As it aged, however, consideration was given to constructing a new building in the late 1960s. Because the Museum was already holding public entry exhibitions throughout the year, at the time, a decision was made to construct the new building on adjacent land so as to avoid a prolonged closure. MAYEKAWA Kunio undertook its design, and the new museum building opened in 1975.

れも現在の当館の活動に直結するもので、1は特別展などの、古今東西の優れた作品を展示するための展示室を指し、2は公募団体等の同時代の作家たちの作品展示のための展示室、3は講堂やスタジオなど、市民の皆さんが美術に触れる機会を持てるスペースを指しています。これらをそれぞれ機能ごとの棟に収め、地下のロビー階がすべての棟への入口となるように設計しました。このデザインのために、ご来館の皆さまが時として迷子になってしまうことも起こるのですが、前川は、非日常空間かもしれない美術館に来た際には、日頃の時間の流れを少し忘れて、少しさまようことも楽しんでもらえたら、という思いを込めたといわれています。ですから、旧館の正面入口のような荘厳さを目指すのではなく、森の中に迷い込むような設計にしたのです。また、館内外のしつらえには、日常にある素材を使用しました。たとえば、ロビーのペンダントライトは銅製、扉の取っ手は南部鉄器や木製、外壁のタイルは常滑焼です。どれも奇抜な素材ではなく、手入れをしながら永く使える素材を選んでいきます。

その後、2010（平成22）年から2年をかけて、建物の配管の取り換えやバリアフリーのための改修工事を行いました。見た目を大きく変えずに、次の数十年も皆さんに安心してご来館いただけるよう、改修を行い、今日の姿があります。

（東京都美術館 学芸員 河野佑美）

Burying about 60% of the building's volume underground, Mayekawa separated the three functions—a thematic exhibition function, an exhibit function for art groups, and a cultural activities function—into distinct blocks like “a small town.” Introducing an underground lobby as their shared entrance, he intentionally created an uncommon space reminiscent of “roaming in a forest.” Mayekawa also actively utilized durable everyday materials, such as copper light fixtures, Nanbu ironware handles, and Tokoname-ware tiles. Thereafter, from 2010, a two-year renovation was undertaken to replace the plumbing and make the building barrier-free. These forward-looking improvements were achieved without significantly altering the building's exterior.

（KONO Yumi, Curator, Learning and Public Projects）



い つ も 上 野 で

アートへの入口は上野駅の改札から。 「文化創造HUB」の目指すまちづくり



JR上野駅駅長
齊藤裕司さん
SAITO Yuji
JR Ueno Stationmaster

JR上野駅中央改札の上、修復のすんだ猪熊弦一郎《自由》を背にした齊藤裕司さん。「やっぱりこの作品が個人的にはいちばんオススメですね。猪熊先生が1951年に『自由』をテーマに作品を作られた意味は、今でも本当に大きいと思います。」「文化創造HUB」の舞台となるグランドコンコースは6月に完成したばかり

SAITO Yuji stands before INOKUMA Genichiro's newly restored mural *Freedom* above the Central Gate at JR Ueno Station. "This is the artwork I personally recommend the most heartily. That INOKUMA created a work of *Freedom* theme in 1951 is deeply meaningful, still today." The Grand Concourse—center stage for the Ueno Station "CULTURE & CREATIVITY HUB"—was completed just last June.

上野駅が開業したのは1883（明治16）年。おかげさまで今年の7月28日に143周年を迎えることができました。あらためて皆さまに心よりの御礼を申し上げます。現在JR上野駅で乗り降りされる方は1日あたり約34万人、乗り換えを含む利用者の方は約51万人。かつてのターミナル駅としての性格はやや薄れ、今は「北の玄関」という意味合いが強くなりました。私自身も山形出身なので、東京といえば上野というイメージですね。

上野には繁華街、オフィス街としての顔のほかに、文化の街という顔があります。上野公園は上野動物園、東京都美術館、国立西洋美術館、国立科学博物館、東京文化会館などの文化施設が立ち並び、日本でも有数の文化エリアになっています。鉄道に携わる人間としては、あくまでもお客さまの信頼を得

ることが最優先ですが、それ以外にもこうした文化的アセット（資産）を皆さまに向けて展開していくことが肝心だと考えています。

上野駅は2024年から、文化を通じて「ひと」と「まち」・「地域」をつなごうというコンセプトの下、「文化創造HUB」としての再構築を進めてきました。その舞台となる新グランドコンコースを今年6月にオープンできたときは本当に感無量でした。上野駅にたくさんの美術作品が設置されていることをご存じの方も多いと思います。朝倉文夫の彫刻《翼》《三相》などが設置されているほか、中央改札上の猪熊弦一郎の壁画《自由》は、約10ヵ月の修復を終えて今年3月にお披露目となりました。現在修復作業の平山郁夫のステンドグラス《昭和六十年春 ふる里・日本の華》は、今年度中に新幹線改札内への移

設・再設置を予定しています。そのほかにも見どころはいろいろありますので、宝探しのようには作品を探してみるのも楽しいですよ。

こうした文化体験の創造・発信に務めるだけでなく、横のつながりといいますか、地域とのつながりも重要です。青柳正規先生が文化庁長官のころ、「上野『文化の杜』新構想」を唱えられましたね。これは年間3000万人の方に上野にお越しいただいて文化に触れる環境を整備しようという趣旨のものでした。これは今は「上野文化の杜」という文化



朝倉文夫《三相》。このほかにも、上野駅にはたくさんの美術作品が設置されている
Asakura Fumio's *Three Phases*. Many other artworks are also permanently displayed at Ueno Station.

芸術事業のアクティビストチームとして定着しており、この中に上野駅も名を連ねています。こうした連携をすることで、お客さまがまちを回遊されることとなり、まちの側も潤うものと期待しています。

Ueno Station, which opened in 1883, marked its 143rd anniversary on July 28th this year. Currently, the station serves some 340,000 passengers and 510,000 users. Ueno Park is one of Japan's premium cultural centers, home to the Ueno Zoo, Tokyo Metropolitan Art Museum, The National Museum of Western Art, National Museum of Nature and Science, Tokyo Bunka Kaikan. Fostering these cultural assets for everyone to enjoy holds central importance for us. Since 2024, Ueno Station has undergone transformation into a "CULTURE & CREATIVITY HUB" under the concept of connecting "people, districts, and regions" through culture. In addition to creating and promoting cultural experiences here at Ueno Station, where many artworks are permanently displayed, we engage in tie-ups with



2020年に完成した公園口駅舎。25年には国際的な鉄道デザイン賞であるブルネル賞を受賞

Park Gate Building, completed in 2020. Won the Brunel Award, an international award for railway design, in 2025.

こうした取り組みの一環として、2020（令和2）年には公園口駅舎をリニューアルしました。それまで改札の目の前にあった車道が歩行者空間になったことに驚かれた方も多かったでしょうが、さまざまな文化施設がぐっと近づいたのではないかと思います。東京都美術館さんは「アートへの入口」というミッションを掲げられていると伺いましたが、まさに「アートへの入口」は上野駅の改札からですね。実は話題の特別展やイベントがあると、上野駅では乗降客の数が目に見えて増えるんですよ（笑）。しかも、そうした先が上野にはいくつもある。その意味では、上野駅は文化が人を引き寄せるという事実をいちばん目の当たりにしている駅なのかもしれませんね。

Ueno's cultural facilities, hoping that station users will go out and discover our district and, by extension, bring it economic benefits. In 2020, the station's Park Gate building was renovated and roadway directly before its ticket gates became a pedestrian space. This has brought us closer to the park's various cultural facilities. "The doorway to art opens at Ueno Station's ticket gates." In fact, the number of passengers boarding and alighting at Ueno Station visibly increases whenever high-profile special exhibitions or events are held. Ueno has many other popular destinations too. So, in this sense, Ueno Station may be the station where the fact that culture attracts people is most visibly on display.

開館100周年記念展 見どころ紹介

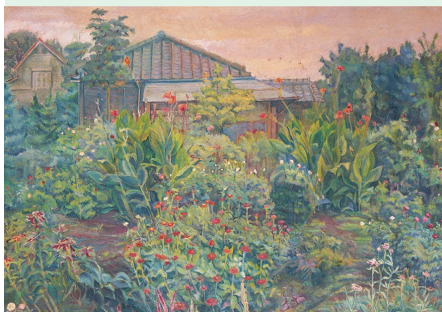
東京都美術館開館100周年記念

この場所の風景—上野・大牟田・ブエノスアイレス

100th Anniversary of the Tokyo Metropolitan Art Museum
Views of This Place—Ueno, Omuta, and Buenos Aires

会期：2026年7月23日(木)～10月7日(水)

会場：ギャラリー A・B・C



藤岡鉄太郎《百日草の庭》1926年 東京都現代美術館蔵
Fujioka Kanetaro, *Garden Full of Zinnias*, 1926
Museum of Contemporary Art Tokyo

本展は、1926年に開館した当館を舞台に繰り広げられた近現代美術の動向と、上野から遠く離れた場所で個人的に続けられた創作の営みを並行してたどるものです。

第一部「上野—東京都美術館の100年」では、開館初期から戦時下の美術館、戦後のアンデパンダン展、1975年の新館開館後の状況などを同時期の上野の風景とともに概観します。

第二部「大牟田—江上茂雄の100年」では、福岡・大牟田に暮らし、独学・独力で描くことを貫いた江上茂雄(1912-2014)というひとりの人物に焦点を当てます。江上は、鉛筆、水彩、クレパス、クレヨン、木版などの身近な画材だけを使い、自身のそばにある風景を写し続けました。101歳で亡くなるまで、驚異的な情熱を創作に注ぎ込んだこの作家の軌跡を、約400点の多

彩な作品からたどります。

第三部「ブエノスアイレス—《百日草の庭》をめぐる100年」では、大阪を拠点に活動するアーカイブ・プロジェクトのAHA!が、本展のために取り組んだリサーチ・プロジェクトの展示を行います。AHA!は、当館の所蔵品第1号とされる絵画作品《百日草の庭》(1926年制作、現・東京都現代美術館蔵)に注目し、詳細不明の作者「藤岡鉄太郎(かねたろう)」を探すプロジェクトを計画。同一人物かもしれないひとりのアルゼンチン移民の存在にたどり着き、その足取りを追います。

異なる地点で展開された創作活動と向き合う本展が、美術そして美術館の今後のあり方について考える機会となれば幸いです。

(東京都美術館 学芸員 大内曜)

An exhibition tracing the developments in modern and contemporary art showcased in the Museum's halls after its 1926 opening and, in parallel, art practices sustained individually in locations far from Ueno.

Part One, "Ueno—The Tokyo Metropolitan Art Museum's 100 years," overviews the Museum's changing circumstances, from war and postwar reconstruction to its reopening in a new building in 1975, along with displays of scenes unfolding in Ueno in those same periods. Part Two, "Omuta—EGAMI Shigeo's 100 years," focuses on Egami Shigeo, a self-taught artist who painted entirely on his own throughout his life in Omuta, Fukuoka. Finally, Part Three, "Buenos Aires—Garden Full of Zinnias's 100 years," exhibits a research project undertaken by AHA! for this exhibition.

(OUCHI Hikaru, Curator)

東京都美術館開館100周年記念

大英博物館日本美術コレクション

100th Anniversary of the Tokyo Metropolitan Art Museum
Edo in Focus: Japanese Treasures from the British Museum

百花繚乱～海を越えた江戸絵画

会期：2026年7月25日(土)～10月18日(日)

会場：企画展示室

約270年の歴史をもつ大英博物館から、日本美術コレクションの名品を厳選してご紹介する展覧会です。大英博物館には、縄文時代から現代にかけて幅広い時代の日本の資料が集められていますが、その最も充実している時代が江戸時代のもので。会場では、幕府お抱えの御用絵師集団・狩野派、京都の画家・円山応挙、あるいは大坂で活躍した西山芳園・完瑛父子など、江戸時代を中心に流派や地域を網羅するさまざまな美術をご覧くださいませ。

また、浮世絵も大英博物館所蔵の日本美術コレクションの見どころです。大英博物館では歴代学芸員の審美眼のもとに、刷りの状態の良い美しさと史料的价值を併せ持つ良質な浮世絵版画が集められてきました。本展では浮世絵の黄金期であり、錦絵が発展した時代に活躍した八大

絵師、すなわち春信・清長・歌麿・写楽・豊国・北斎・広重・国芳らの作品を展示します。作品を通じて各絵師の魅力に目を向



歌川広重《「名所江戸百景 亀戸梅屋舗」》
1857年 大英博物館蔵

Utagawa Hiroshige, *The plum garden at Kameido, from the series One hundred famous views of Edo*, 1857
© The Trustees of the British Museum



西山完瑛《鸚鵡図》1888年 大英博物館蔵
Nishiyama Kan'ei, *Six parrots and a cockatoo*, 1888
© The Trustees of the British Museum

け、浮世絵の歴史を体感いただく機会になるでしょう。さらに肉筆浮世絵からも、貴重な作品の数々が出品されます。その中には、最晩年の喜多川による大幅《文読む遊女》や、幕末明治期の画家・河鍋曉斎がイギリスの収集家アンダーソンの依頼を受けて制作した《鳥獣戯画 鼠曳く瓜に乗る猫》など、珠玉の名品が含まれます。百花繚乱ともいべき多種多彩な名品を総覧する機会となるだけでなく、国内外の各地で花開いた多様な文化の魅力を再発見する機会となれば幸いです。

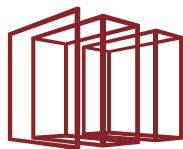
(東京都美術館 学芸員 山田桂子)

Presenting masterpieces carefully selected from the Japanese art collection of the British Museum, a venerable institution with a history spanning some 270 years. The collection, while covering all chronological eras from the Jomon period to contemporary times, is particularly rich in art of the Edo period. From Kano School artists serving as official painters for the shogunate to Kyoto painter Maruyama Okyo and prominent Osaka painters Nishiyama Hoen and his son Nishiyama Kan'ei, artworks of wide-ranging schools and regions are featured, with a primary focus on the Edo period.

(YAMADA Katsurako, Curator)

**TOKYO
METROPOLITAN
ART MUSEUM
NEWS**

東京都 美術館 ニュース



100th Anniversary
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM

No. 483

開館100周年記念号



© (株)大林組

東京都美術館ニュース No.483

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS

発行日 2026年8月31日

発行 東京都美術館 (公益財団法人東京都歴史文化財団)

企画・編集 東京都美術館 広報担当

デザイン 株式会社 インディゴ デザイン スタジオ

翻訳 アムスタッツ コミュニケーションズ

印刷 望月印刷株式会社

© Tokyo Metropolitan Art Museum

東京都美術館

〒110-0007 東京都台東区上野公園8-36

Tel 03-3823-6921 / Fax 03-3823-6920

公式サイト <https://www.tobikan.jp/>

*最新情報は公式サイトで
ご確認ください



*バックナンバーは
こちら



表紙の作品 — 鈴木春信《雪中相合傘》1767年頃 大英博物館蔵

Suzuki Harunobu, *Young man and woman walking in the snow*, ca. 1767

© The Trustees of the British Museum

